

ま 人 橋

ゆ 物 口

み 語 譲

さ

自由と
個人と
ぼくらの責任

まゆみさん

物語

橋口譲一

自由と個人とぼくらの責任

情報センター出版

まゆみさん物語

1987年 3 月21日 第1刷

定価 1200円

著 者 橋 口 譲 二
発 行 者 富 田 耕 作

発 行 所 株式 情報センター出版局
 会社

東京都新宿区四谷2-1
四谷ビル 〒160
電話 東京 (358)0231
振替 東京 4-46236

©1987 Joji Hashiguchi

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-7958-0592-X

印刷 森原印刷・グラビア精光社
日本音楽著作権協会(出)許諾第8662133-601号

目 次

プロローグ
7

1 ベルリンから東京へ
11

2 見えない殺人
41

3 三〇センチ四方の自由
73

4 彼女の呟き
103

5 夢見る視線
133

6 ノイバウテンとクリスチアーネ
151

写 真
東京1986夏—1987冬
169

7 僕らの家出
233

エピローグ
265

ま
ゆ
み
さ
ん
物
語

明日へ

ブ ロ ー グ

井の頭公園の梅が咲き始めたある夜、僕は仕事場から近くの雑木林へ散歩に出た。強い風が吹いている。まるで嵐だ。

しかし風は暖かく、むせかえるような強い梅の香りをはこんでくる。ざわざわと枝が風に揺れる音がする。どこまでも遠くに歩いて行きたくなるような春の夜だった。

雑木林は一息ごとに大きく風を吸い込んで、季節の変わる準備をしているかのようだ。僕はこんな春の夜が好きだ。

歩いていると木と木の間にカメラの三脚を立てて写真を撮っている人影に気づいた。

カメラを空に向けて、木と空の間を撮っている。後ろ姿からすると学生風のまだ若い男のようだった。

彼は立ち止まった僕には気づかず、シャッターを押すたびにガッツポーズをして手ごたえを確かめている。

僕がカメラを仕事の道具にしだしてから十年が過ぎた。そして、彼のような、十代の少年少女たちとかかわりだしてからもう七年になる。

考えてみれば随分長い間十代を通して社会を見てきた。これで区切りをつけようと思ったことも何度となくあったが、その都度彼らに心動かされることがあり、ふつきれずに今日まできてしまった。

僕は東京にいる時はいつも吉祥寺―新宿―渋谷間の定期券を買って、時間があれば電車に乗り、

気のむいた駅で降りては街をブラブラしている。電車に乗っていても、街を歩いていても自然に目の止まる先には十代や若い人たちがいる。そのことは、ベルリン、ニューヨークと都市は変わっても同じだった。

「あいつらなんでここにいるんだろう」「どんな部屋に住んでいるんだろう」「どんな大人になっていくのかな」と、勝手に考えてしまう。彼らの前で足を止める時もあれば、そのまま通り過ぎる時もある。

今までも「橋口は十代しか撮れない」という雑音もよく聞こえてきた。そのたび、僕は「おう悪かったな」と開き直ってきた。

友人や仕事関係の知人にも「今度も十代がテーマですか」「よっぽど十代が好きなんです」と言われ続けてきた。

しかし十代がそれほど好きかと聞かれると大好きというわけでもない。でも、何故か非常に気になってしまうのだ。

それは誰かに頼まれたわけでもなく、純粹に僕自身のこだわりから出発したことだった。自分の目で見、手でさわり、体全体で十代を感じとる作業を、自分で金と時間を捻出しながら僕は続けてきた。そうして七年間が過ぎた。

ただ、十代の評論家であるかのように見られたり、論評を求められるのには困っている。そんな時、僕はいつも「わからないですよ、十代のことなんて。だって二十も歳が離れているんです

から」と答えてきた。

そう、彼らのことはよくわからない。しかし、わからなくても十代を見続けてきたのは確かだった。それは、やはり気になるからだった。

十代から二十代前半という年齢はその先どう生きていくにしろ、一番可能性のある時期だと僕は思う。僕が単なる一億分の一になりたくないと思って鹿児島から上京してきたのも一九歳の時だった。

長い戦後の、とても平和な日々が続いている中で今の若い人たちは生きている。彼らは僕なんかから見ると本当はキラキラしてまぶしいはずだ。

ところが、それがちつともまぶしくない。輝いていないのだ。逆に僕の心は街を歩くたびにワサワサしてくる。この一年特にそんな思いが強くなった。何故なのだろうか。

若い人たちが輝きを失いつつある今の時代と、僕は自分に区切りをつけるためにもきっちり向かい合ってみようと思った。

1 ベルリンから東京へ

僕は目が覚めるとすぐ起きて、窓のカーテンに手をのばした。すこしドキドキしている自分がよくわかった。ちょうどその時、太陽のない空をカモメが二羽、風に乗ったような感じでスーッと通り過ぎていった。空の下にはくすんだ街並みが続いている。

窓のノブに軽く力を加えると、「カタッ」と小さな音をたてて窓は外に向かって開いた。同時に、コークスのおいを含んだ朝の冷たい空気が部屋にはいりこんできた。僕は目を閉じて大きく息を吸った。冷たい空気が気管を通り、体の中にはいつていくのがよくわかった。吐き出したくない二年ぶりのベルリンの朝の空気だった。

朝食を済ませると、僕はすぐ外に出た。まず、動物園に行ってみることにした。

僕はこの一年ほど、世界の大都市にある動物園をたずねる旅を続けていた。動物園の中にいる人間たちという共通項を通して都市の動物園という空間の役割を考えたり、一種の人工空間の中でそれぞれの国や街に暮らす人々の日常と非日常が混じりあうさまを見ようというのが僕のねら이었다。だから今回のベルリン訪問の目的のひとつは動物園だった。

記憶が間違っていなければ、ホテルから動物園までゆっくり歩いても、二〇分あれば着くはずだった。

パン屋にクリーニング屋、ハインリヒ・ツエレの絵がたくさん並んでいる版画屋。このあたりは何もかもそのままだ。ホモのよく集まるカフェも健在だった。コハク屋さんのウィンドウに並んでいるネックレスも指輪も二年前とまるつきり同じだ。そしてコークスとイースト菌の焼ける

においの入り混じった朝の空気も同じだった。

しだいに不思議な気持ちになってきた。昨日もその前もずっと、僕は厚ぼったい古着のコートを着て、こうして歩いていったような気がする。

ベルリン一の大きなデパート KaDeWe の角に來ると、ウィッテンベルク広場は工事も終わってきれいに整備され、広場の周囲には菩提樹が植えられて噴水までできていた。二年前は小さなテントを張って雨よけにしていただけの花屋も、小さいけれどきれいな小屋を建ててもらって商売を続けていた。

KaDeWe の反対側に渡ろうとした時、ちょうど車道にはさまれた安全地帯のところに、高さ三、四メートルぐらいの大きな看板が新しく立っているのに気づいた。鉄骨製なのが見るからに頑丈そうなその看板には、大きな字で「私たちが忘れてはならないこと」と書かれていた。そして、その下には「アウシュビッツ、ダッハウ、ベルゲンベルセン……」と大戦中にナチの強制収容所のあった地名が並んでいた。

見上げると看板と KaDeWe デパートがちょうど重なるようにして見えた。この場所は日本では、例えば、銀座の三越デパート前のような所だ。

そんな場所に、このような看板が新しく建てられたことに強いショックを受けた。と同時に、街が新しく生まれ変わっていかうとする時に、都合の悪いものをできるだけ隅に追いやっていくのではなく、日々の暮らしの中で絶えず確認していかうとする姿勢に、ベルリンの持っているあ

る種の健康さを今さらながら僕は強く感じた。

冬の動物園は木の葉も落ちて、黒々とした枝しか目にはいらない。しかし夏は緑も多くゆつたりとしていて、ベルリンでも僕の好きな場所のひとつだった。気分を変えたい時などよく足を運んでいたものだった。

動物園に限らず、街を歩いていても夏と冬では随分違う。夏のあいだ生い茂った木々に隠されていた風景が冬になり葉がみんな落ちてしまったことで、木々の間にもうひとつ違う世界ができあがっていた。冬は夏より空間が広がったような気がする。夏には気がつかなかったことを冬になつてはじめて発見したりすることがたくさんあった。もちろんその逆もまた言えるのだが。

だけど、それとは別に動物園の中を歩きながら、随分風景が変わったなと思った。

イスラム寺院を模した動物舎ができあがっている。そこにはカモシカとキリンが住んでいた。それだけではなくZOO駅前正門の反対側にある、ブダペスト通りに面したもうひとつの門にはそりかえった赤い屋根が作られていて、その下には二頭の石造りの象が鎮座していた。エレファント門と名づけられている。この門にしろカモシカ舎にしろ、空襲で破壊されたのがごく最近になって復元されたものだった。

カバ舎からサル舎と、僕は一日中動物園を歩きまわっていた。午後三時を過ぎたあたりから急に風が冷たくなり、目の前に映るものもことなく寂しい、救いのない冬の風景に見えてきた。

そろそろ動物園にいるのがつらくなりかけた頃、教会の鐘が聞こえてきた。コートの袖をまくつ